

研究ノート

避暑地の共同体と周辺地域への関わり

—大学村と北軽井沢を事例に—

今 堀 洋 子

The Engagement of a Summer Resort Community with Its Surrounding Region: A Case Study of University Village and Kita-Karuizawa

Yoko IMAHORI

要 約

本研究ノートは、群馬県北軽井沢に位置する法政大学村を対象に、避暑地に形成された共同体と周辺地域との関係性を考察することを目的とする。大学村は、法政大学教職員を中心として形成された別荘地であり、文化人や知識人の滞在を通じて独自の文化的共同体として発展してきた。本稿では、先行研究を踏まえつつ、大学村の成立過程、文化的特徴、自治の仕組みを整理し、その歴史的・文化的意義を明らかにした。

さらに、周辺地域である北軽井沢が直面する人口減少や少子高齢化、一次産業の担い手不足などの課題について、統計データを用いて現状を整理するとともに、地域で店舗経営を行ってきた生活者へのインタビューを通じて、生活の視点から地域の実態を検討した。

その結果、大学村は文化的・人的資源を蓄積する一方で、周辺地域では生活基盤の縮小が進行しており、両者の間には関係性の非対称性が存在することが示唆された。本研究は、避暑地研究に対して文化的共同体と周辺生活圏との関係を質的に捉える視点を提示するとともに、避暑地に形成された共同体が周辺地域とどのような新たな関係性を構築し得るのかという問いを提起するものである。

キーワード：大学村、北軽井沢、避暑地共同体、過疎化、生活者調査、文化資源、地域活性化

1. はじめに

1-1 本研究ノートの背景と問い

筆者にとって大学村（群馬県吾妻郡長野原町北軽井沢）は、単なる調査対象ではなく、人生の一部といえる場所である。筆者の曾祖父はかつて法政大学に勤めており、その当時、学長であった松室致が「教職員に文化的な暮らしを提供したい」という思いから分譲した土地を購入した一人であった。草軽電鉄という、軽井沢と草津を結ぶ硫黄運搬の山岳鉄道が走っていた時代である。曾祖父と曾祖母はその列車に揺られ、軽井沢に到着してからは馬車に乗り、どの区画が良いかを見て回り、現在の場所を選んだと伝え聞いている。更に、夏に滞在する山荘だが、戦時中は、疎開先として冬も過ごし、母たちは、地元の北軽井沢小学校に通い、庭を畑にしてイモ類を栽培したり、曾祖母と祖母が反物を持って、地元の農家さんの元に行き、野菜と物々交換をしたそうである。

そのような縁から、筆者自身も生まれたときから毎年夏を大学村の山荘で過ごしてきた。半世紀以上にわたり、大学村と北軽井沢を見つめてきたことになる。かつては、夏休みを丸ごと大学村で過ごす家族が多く、北軽井沢の中心街も大変賑わっていたという記憶がある。照月湖には浅間観光ホテルがあり、多くの観光客が訪れ、地域全体に活気があった。しかし近年、その風景は大きく変わりつつある。長期滞在する家族は減少し、地域の商店街にも空き店舗が目立つようになった。1962年に草軽電鉄が廃線になって久しく、交通手段の変化とともに地域の動態は大きく揺れ動いた。そして2024年には北軽井沢小学校も廃校となり、地域の過疎化が深刻な段階に入っていることを実感した。

このような背景から、筆者は「100周年を迎える大学村が、地域の活性化にどのように貢献できるのか」という問いを立てるに至った。本研究は、筆者個人の記憶と経験に支えられた問題意識を出発点とし、大学村と北軽井沢の関係性、地域が抱える課題、そして今後の可能性を検討する。

1-2 先行研究における本研究ノートの位置づけ

避暑地や別荘地を対象とした研究としては、軽井沢を中心に、その形成過程や空間構造、景観の変容を明らかにする研究が蓄積されてきた。たとえば内田青蔵らは、戦前期の軽井沢別荘地を対象とした建築史・都市史研究において、別荘の立地や建築形式の変遷を通じて、近代日本における別荘地の成立と変容を明らかにしている⁽¹⁾。また梅干野成央らは、保養地としての軽井沢の景観形成過程を分析し、自然環境と開発との関係を論じている⁽²⁾。これらの研究は、避暑地・別荘地の空間的・歴史的理解に大きく貢献してきた。

一方で、別荘地の運営や管理の側面に着目した研究も存在する。峯苦俊之らは、別荘地の運

営・管理における自治体や管理主体の役割を整理し、別荘地が抱える制度的課題を明らかにしている⁽³⁾。しかし、これらの研究はいずれも、空間計画や制度、景観といった側面に主眼が置かれており、避暑地を「生活の場」として捉え、そこに形成された共同体の文化的特性や、周辺地域との関係性を質的に検討するものは多くない。

本研究ノートは、こうした先行研究の成果を踏まえつつ、法政大学村という避暑地に形成された共同体を対象に、その歴史的形成過程や自治の仕組み、文化的資源に着目する点に特徴がある。さらに、大学村と周辺地域である北軽井沢との関係を、生活者の記憶や語りを含めて検討することで、避暑地の共同体と周辺生活圏との関係性を、生活史的・文化的視点から質的に捉えることを目的とする。

2. 大学村の歴史、文化、共同体としての構造

2-1 成立の背景と開村

法政大学村は、1920年（大正9年）、当時の法政大学学長であった松室致が、都会に住む大学関係者に「自然と文化の共存する生活の場」を提供することを目的に、群馬県吾妻郡長野原町大字応桑（現・北軽井沢）の広大な土地（273ヘクタール）を購入したことに始まる。もともとの土地は、旧・北白川宮家の牧場であったが、草津軽便鉄道（後の草軽電気鉄道）を経て、譲り受けられたものだった。大正末から昭和初期にかけて、松室らは「教職員と学生を中心とした理想的な教育と共同生活の場」を作ろうと考え、教職員らに対して坪1円、500坪を基本単位とする土地分譲を始めた。1928年（昭和3年）には第1区として約40戸の山荘が建設され、公式に



図1 大学村に曾祖父が開村当時に建てた山荘（筆者撮影）

「法政大学村」が成立した。筆者の曾祖父も、当時法政大学の教員であったため、そのうちの一つを購入し、山荘を建てた（図1）。

当時、電気も水道も整備されておらず、住民たちは自ら道を開き、水源を掘り、共同でインフラを築き上げた。その過程で、村は「別荘地」ではなく「共同生活の場／共同体」として芽生えたのである。さらに1929年（昭和4年）には、当時の地蔵川駅の駅舎を新築して鉄道会社に寄付し、駅名を「北軽井沢駅」と改称した。これによって交通の便が整い、大学村と外部とのアクセス性が向上した。

こうした制度的かつ物理的な基盤整備と、住民相互の自治の意識の中で、大学村は避暑地であると同時に、自律的な「文化的共同体」としての土台を確立していった⁽⁴⁾。

2-2 村民構成と文化人の集う場としての大学村

初期の村民は主に法政大学の教職員だったが、開放性と自由な精神から、同大学以外の学者や文化人も次第に村民として迎え入れられた。たとえば、学者・出版人・作家・思想家など、多様な知的背景を持つ人々が集まり、「都会の喧騒から離れた高原でゆっくりと創作・思索する場」として大学村は機能した⁽⁵⁾。

表1は、法政大学村に一定期間滞在し、創作・思索活動を行った文化人のうち、滞在の事実と

表1 大学村にゆかりのある文化人

氏名	分野	生年-没年	大学村との関わり	滞在時期（概数）	関連作品・活動
谷川俊太郎	詩人	1931-2024	大学村に長期滞在し創作活動	1960年代以降	『二十億光年の孤独』
大江健三郎	作家	1935-2023	大学村に山荘を構え滞在	1970年代以降	高原滞在に言及した随筆
野上弥生子	作家	1885-1985	大学村での生活経験を随筆に記す	戦前～戦後	『山の上の家』
岸田衿子	詩人	1929-2011	幼少期より大学村で夏を過ごす	戦後	児童詩・随筆
岸田今日子	女優	1930-2006	幼少期の滞在経験	戦後	エッセイ・朗読活動
安倍能成	哲学者	1883-1957	山荘を拠点に思索	戦前～戦後	教育思想・随筆
田辺元	哲学者	1885-1962	大学村を思索の場として利用	戦後	哲学論考
佐野洋子	絵本作家	1938-2010	大学村にゆかり	戦後	『100万回生きたねこ』

作品との関係が文献等から確認できる人物を対象として整理したものである。大学村に関わったすべての文化人を網羅することを目的としたものではなく、文化的活動との関係が文献上確認できる事例を示すために整理した表である。

また、ごく近年の文学においても、大学村は描かれている。映画化もされた小説「ジャージの二人」(2003)⁽⁶⁾の著者長嶋有も大学村の住民であり、小説は北軽井沢が舞台となっている。また、作家松家仁之の小説「火山のふもとで」(2012)⁽⁷⁾には、主人公が「夏の事務所」として北軽井沢の大学村に通っていることが記されており、大学村は現代においてもなお、創作者の思考・執筆の場として生き続けている。

なお、大学村における文化的活動が現在も継続していることを示す補助的資料として、筆者が2014年に記録した私的文章(資料1)を巻末に付した。この記録は、当時の講演会や文化的催しに参加した際の観察を含むものであり、大学村が現在においても文化的共同体として機能している一端を示す一次資料として参照するものである。

このように、大学村は、単なる避暑地を超えて、自然の中で書き、考え、創る人々の“静かな拠点”として機能してきた。ここでの生活体験が直接に、あるいは間接に、多くの文学作品や思想へと結晶化したという事実は、大学村が文化的共同体として特異な価値を持つことを示している。

また、村民相互の交流は、単なる挨拶や隣人関係にとどまらず、談話、読書会、創作、知的議論など、多様な文化活動を生む土壌となった。都会から遠く離れたこの高原の場所こそが、「静寂」と「自由」を兼ね備えた創造の場として多くの人を惹きつけたと考えられる。

2-3 自治と水道協同組合 ― 共同体としての構造

大学村では、村民による自治制度が早くから貫かれていた。村の運営は「村会制」を採用し、選挙で議員を選出、初代村長に松室致、村会議長に当時の教員であった野上豊一郎が就任した。その後、1937年(昭和12年)、村会制から「組合制度」に移行し、「法政大学村」から単に「大学村」へと改称された。これにより、より自治的・協同的な共同体としての性格が強まった⁽⁸⁾。

また、大学村には独自の水源があり、村民による水道供給と環境保全の協定のもと、水道協同組合が設立された。これにより、都市のインフラに依存せず、自然と調和した自立的な生活基盤が形成された。「水を共同で守る」という仕組みは、大学村が単なる「別荘地ライフ」ではなく、「共同体としての生き方」を選んできた証である。

こうした制度と精神があったからこそ、厳しい自然条件の中でも村は維持され、夏季のみならず、戦時中には疎開先として冬も利用されたり、住民同士で助け合ったりするといった「共同体の息吹き」が長く保たれてきたのである。

2-4 名所・インフラ：駅舎、湖、旧倶楽部など

大学村と北軽井沢の歴史を象徴する物は現在もその痕跡が残っている。

たとえば、旧北軽井沢駅舎は、もともと草軽電気鉄道の地蔵川駅として機能していた。1929年、大学村側が駅舎を新築して鉄道会社に寄付し、駅名を北軽井沢駅と改称した。駅舎は洋風と和風が混じるモダンな意匠で造られ、正面玄関の欄間には法政大学のイニシャル「H」がデザインされていたという。この駅舎は、鉄道廃線後も残され、現在は国の登録有形文化財に指定されている（図2）。



図2 北軽井沢の駅舎（筆者撮影）

また、大学村には、「南紀倶楽部」（旧大学村倶楽部）という共有施設があり、かつては、食堂・大浴場・談話室・娯楽室などが備えられ、村民の憩いと交流の場となっていた。そこには所蔵書として文庫が並び、創作や読書、議論の場として機能していたという。倶楽部の建物は当時の大学の校舎の古材を用いたとも伝えられる。現在でも、大学村の青少年会（大学生や高校生中心）によって大学村の小学生の勉強をサポートする勉強会が、この施設で行われていたり、隣接する芝生広場では、お盆の時期にキャンプファイヤーも開催されている。

さらに、村を流れる川をせき止めて造られた人造池が、照月湖（図3）である。1930年代にこの池の造成がなされ、自然を過度に破壊せず、小規模な池にとどめることで、自然との調和を意識した設計がなされた。これは、大学村の理念である「自然と人間の共生」を象徴するエピソードである。残念ながら、照月湖は、2019年の台風19号による大雨の影響で、北側の土手が決壊し、湖水が消滅してしまい、現在は湖の底が見えている状況である。

これらの名所やインフラは、現在も地域の風景に残り、「歴史の記憶」としての役割を果たし

ている。



図3 決壊する前の照月湖（友人撮影）

3. 周辺地域（北軽井沢）の魅力と抱える課題

ここまで、大学村の歴史、文化、共同体としての構造について述べてきた。ここからは、大学村の周辺地域である北軽井沢の魅力と抱える課題について、住民のインタビューも交えて述べていく。

3-1 北軽井沢という地域の位置づけ

北軽井沢は、群馬県吾妻郡長野原町の東部に位置し、浅間山の北麓に広がる高原地域である。標高 1,100～1,300 メートルの冷涼な気候を活かし、明治以降、避暑地として開発が進められてきた。軽井沢町（長野県）に隣接しながらも、より静かで素朴な環境が保たれており、観光地としての軽井沢とは異なる独自の性格を持つ。

歴史的には、草軽電鉄（旧・草津軽便鉄道）が軽井沢と草津温泉を結んでいた時代に、多くの旅客や物資がこの地域を通過し、交通の要所として機能していた。鉄道沿線には商店や旅館が並び、観光客や長期滞在者が利用することで、北軽井沢は夏季を中心に活気に満ちた地域であった。

また、北軽井沢は、大学村をはじめとする別荘地や高原農場、牧草地が点在する「生活」と「自然」が共存する空間でもある。高原野菜の栽培や酪農などの農業も営まれ、観光だけでなく、一次産業が地域文化と暮らしの基盤を形づくってきた。

こうした背景から、北軽井沢は、軽井沢町の華やかな観光開発とは一線を画しながら、高原の

静けさと生活文化が共存する空間として、大学村と密接な関係を築いてきた。大学村の住民や滞在者にとって、北軽井沢の商店街や学校、公共施設、農業や地域行事は日常的に関わる生活圏であり、両者は歴史的にも地理的にも深く結びついている。

3-2 北軽井沢の現状と魅力

北軽井沢の最大の魅力は、浅間山麓がもたらす豊かな自然環境である。夏季には冷涼な気候が続き、避暑地として古くから多くの人々に親しまれてきた。標高の高さと広大な森林帯がつくる澄んだ空気、季節ごとに表情を変える山の景観、そして静寂に包まれた環境は、都市生活では得がたい心身の安らぎを提供してきた。また、周辺には温泉や観光地が点在し、自然環境と観光資源が適度に共存している点も特徴である。

地域の暮らしに目を向けると、北軽井沢は観光地でありながら、農業や酪農が営まれる生活圏としての側面も持つ。高原野菜の栽培や牧草地の広がる風景は、この地域の生業を象徴しており、住民や長期滞在者の生活文化を支えてきた。また、地域の人々によって守られてきた祭礼や行事があり、四季折々の暮らしのリズムを形づくっている。

一方で、北軽井沢は 2000 年代に入ってから、大きな変化に直面している。かつてのにぎわいを支えていた草軽電鉄の廃線後、交通の軸が大きく変化し、自家用車中心のアクセスとなったことで、商店街のにぎわいは徐々に失われていった。また、人口減少と少子高齢化が進行し、2020 年代に入って北軽井沢小学校が廃校となったことは、地域社会の縮小を象徴する出来事となった。

こうした状況の中でも、北軽井沢が持つ自然の豊かさと静けさは揺らいでいない。むしろ、都市から離れた時間の流れや、自然と近接した暮らしを求める人々にとって、北軽井沢は依然として魅力的な滞在地である。地域住民、移住者、長期滞在者、そして避暑に訪れる人々が、それぞれ異なる目的でこの地を選び、多様な生活のリズムが重層的に存在している。

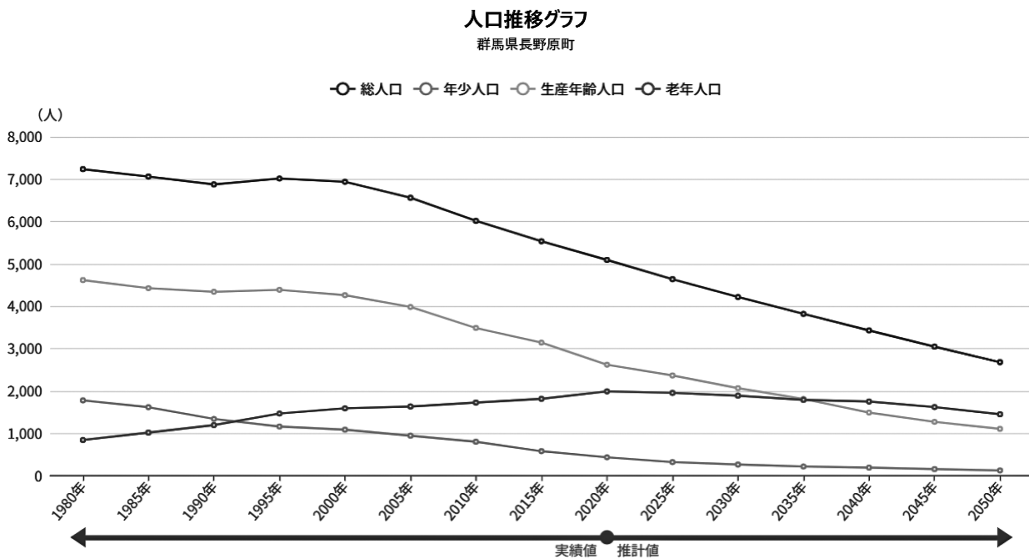
北軽井沢はその歴史の中で、にぎわいと静けさ、観光と生活、開発と自然という複数の軸の間で揺れ動いてきた地域である。その魅力は、単に自然が豊かであるというだけでなく、「時間がゆっくりと流れ、人と自然が共に存在する空間」としての価値にあると言える。

3-3 地域が直面する課題

このように、北軽井沢は豊かな自然環境を有する一方で、近年、地域社会の持続可能性に関わる深刻な課題に直面している。もっとも大きな問題は、人口減少と少子高齢化である。

図 4 に示す通り、長野原町全体の人口は、昭和 50 年の 7,194 人から平成 27 年の国勢調査では 5,536 人にまで減少し、約 23% の減少率となっている。この間、若年人口の比率も低下しており、15 歳以上 35 歳未満の若年者比率が平成 27 年には 10.9% にまで落ち込んでいることが、人口減少と少子高齢化の進行を示している。この流れは生活基盤を支える公共サービスの維持を難

しくし、地域の活力を大きく損なっている。



【出典】
総務省「国勢調査」、厚生労働省「人口動態調査」、国立社会保障・人口問題研究所「日本の地域別将来推計人口」

図4 長野原町の人口推移（地域経済分析システム〈RESAS、国勢調査データより作成〉）

こうした人口動態の変化を背景として、その象徴的な事例が、北軽井沢地区に所在した北軽井沢小学校が2024年3月に廃校したことである。長年にわたり地域の教育と子どもたちの居場所を支えてきた小学校が閉じたことは、単なる学校の統廃合にとどまらず、地域における子育て環境と生活基盤の縮小を象徴する出来事として位置づけられる。この廃校は、将来の人口構造への危機感を地域全体に広げる契機ともなった。

また、地域文化の面でも継承が困難になっている。かつて住民の世代を超えて受け継がれてきた伝統祭りは、現在その担い手の多くが高齢者であり、後継者不足が深刻である。祭りの運営を支える中心メンバーの年齢は70～80代に達しており、このままでは、地域の文化そのものが失われてしまう可能性が高い。

また、農業や酪農についても状況は厳しい。北軽井沢周辺は高原野菜や酪農が営まれてきた地域であるが、後継者不足に加え、経営の安定性や労働負担の大きさが若い世代を遠ざけている。家族経営を続けてきた農家が代替わりできずに廃業する例も少なくなく、地域の一次産業が縮小することで、暮らしの基盤と景観の維持にも影響が及んでいる。具体的に、長野原町における産業別人口をみれば、第1次産業（農業・林業・漁業など）の人口比率が平成12年の14.8%から平成27年の13.6%へと減少しており、第一次産業従事人口の相対的な縮小が進んでいる⁽⁹⁾。これは、農業・酪農といった地域の主要な生活基盤の担い手としての人口が減少していることの一端を示している。

さらに、中心街の商店街では空き店舗が増え、かつて観光客や住民で賑わったエリアの空洞化が進んでいる。自家用車による移動が主流となったことや、生活圏の変化により、地域の中心性が弱まりつつある。

3-4 生活者の視点から見た地域の実態－飯島里絵氏へのインタビューを事例として－

本節では、北軽井沢における地域の実態を、生活者の視点から捉えることを目的として、同地域で長年にわたり生業を営んできた飯島里絵氏へのインタビューを取り上げる。飯島氏は、2017年から2025年10月までの約8年間、北軽井沢駅舎前においてパンとカフェ「ニジノネ」を経営しており、観光客だけでなく地域住民の日常的な利用を支えてきた人物である。店名「ニジノネ」の「虹」には、色や人が交差し、地域の中で多様性が響き合う場所の願いが込められており、飯島氏自身は、多様な人々が交差する場を意図していたと述べている。その店名の通り、この店はコミュニティのハブとして機能し、同世代の住民同士が出会い、友人関係が生まれる場にもなっていた（図5参照）。



図5 ニジノネの入り口（左） ランチプレート（中央） 賑わい（右）（筆者撮影）

このように飯島氏は、北軽井沢における「暮らし」と「地域経済」の両面に関わってきた生活者として、本研究の事例対象として位置づけられる。

インタビューは2025年11月にオンラインにて実施し、①地域での店舗経営の実際、②地域住民との関係性、③人口減少や継承問題への認識、④大学村との関わりと今後への展望を主なテーマとして行った。以下では、飯島氏の語りをそのまま引用するのではなく、発言の文脈を整理したうえで要約的に提示し、地域の構造的課題を理解するための事例として用いる。

(1) 地域における店舗の役割と人のつながり

飯島氏の語りからまず明らかになるのは、「ニジノネ」が単なる飲食店ではなく、地域住民の

交流の場として機能していた点である。開業当初は観光客の来店も一定数見られたが、経営を支えたのは、次第に増えていった地元住民や長期滞在者による日常的な利用であったという。店内では、同世代の住民同士が顔見知りとなり、会話を交わす関係が生まれていった。

この点は、北軽井沢において減少しつつある「偶発的な出会いの場」を、個人経営の店舗が補完していたことを示している。人口減少と商店街の空洞化が進む地域において、こうした小規模な拠点が果たす社会的役割は小さくない。

(2) 店舗閉鎖が示す地域コミュニティの脆弱性

飯島氏は、2025年10月をもって「ニジノネ」を閉店している。背景には、子育て負担と家族サポート不足、経済的不安定さ、生活との両立の困難さがあったという。しかし飯島氏は、「人とのつながりや地域への貢献は大きな財産だった」とも語った。

店舗の閉鎖によって、地域住民が日常的に集う「居場所」が一つ失われたことは大きな損失である。言い換えれば、北軽井沢におけるコミュニティが、特定の個人や少数の担い手に大きく依存している現状を浮き彫りにしている。すなわち、店舗経営者の生活条件や家族状況の変化が、そのまま地域の交流機会の喪失につながるという、コミュニティの脆弱性である。

(3) 人口減少・継承問題に対する生活者の認識

インタビューの中で飯島氏は、地域の将来に対する不安についても言及している。人口減少や高齢化が進む中で、学校の廃校、祭りの担い手不足、農業・酪農の後継者難といった問題が連鎖的に生じているという認識が示された。

飯島氏の語りにおいて印象的なのは、これらの課題が抽象的な「地域問題」としてではなく、「日々の生活の中で実感される変化」として捉えられている点である。子どもの数が減り、行事が縮小され、顔見知りの店や人が次々と姿を消していく過程が、生活者の視点から語られていた。

飯島氏は、「このままだと町そのものが消えてしまう可能性もある」とも語っている。これは、将来予測として断定的に用いるものではなく、生活者が感じている危機感の強さを示す語りとして理解する必要がある。本稿では、この発言を地域の将来像を直接示すものとしてではなく、人口減少が日常生活に及ぼす心理的影響を示す事例として位置づける。

(4) 大学村との関係と今後への示唆

飯島氏はまた、大学村の存在について、北軽井沢における文化的・人的資源の集積地として評価している。大学村に滞在する人々が地域の店舗を利用し、イベントや交流を通じて関係を築いてきた経験は、地域と大学村が緩やかにつながる可能性を示している。

この点から、飯島氏のインタビューは、大学村と周辺地域の関係を考える上で、生活者の立場からの示唆を与えるものである。すなわち、大学村が有する文化的・人的資源が、日常的な交流や小規模な経済活動を通じて周辺地域と結びつくことで、地域の「居場所」や関係性を補完し得る可能性が示されている。

本節で示した内容は、単一事例に基づくものであり、北軽井沢全体を一般化するものではない。しかしながら、生活者の語りを通じて、地域の変化がどのように経験されているかを理解するための一つの視点を提供するものである。

4. おわりに

4.1 まとめ

本研究ノートでは、大学村の歴史的背景と文化的価値、共同体としての構造を整理するとともに、周辺地域である北軽井沢の魅力と課題を検討してきた。大学村は、開村当初から住民による自治や水道協同組合の運営といった自律的な仕組みを持ち、文化人が集う創造的な共同体として独自の発展を遂げてきた。一方で北軽井沢は、豊かな自然と静けさに恵まれながらも、少子高齢化、伝統文化の継承困難、農業・酪農の後継者不足、中心街の空洞化など、深刻な課題に直面している。

また、生活者として地域に関わってきた飯島里絵氏のインタビューは、北軽井沢の現状を一次資料として示し、観光地としてのにぎわいの背後にある「生活基盤の脆弱性」を浮かび上がらせた。ニジノネが果たしていた居場所としての役割は、地域コミュニティの結節点として重要であり、その閉店は地域の脆さを象徴する出来事であった。

大学村は100周年を迎える節目にあり、長年蓄積されてきた文化・歴史・人的資源を、どのように地域へ還元し、周辺と新たな関係性を築いていくかが問われている。本研究ノートはその第一歩として、大学村と北軽井沢の関係性を可視化し、課題の所在を明確にすることを目的とした。

4.2 課題と今後の探求

本研究はノートとしての性格を持ち、いまだ構想段階にある部分も多い。今後の探求に向けて、以下の課題が挙げられる。

①生活者への聞き取り調査の拡充

今回は飯島氏一名の語りを扱ったが、地域住民、移住者、農家、学校関係者、大学村の住民など、複数の立場からの聞き取りが必要である。多様な視点を重ねることで、地域の構造的課題と可能性がより立体的に把握できる。

②他の避暑地との比較研究

菅平、那須高原、つま恋など同様の課題を抱えつつ成功事例となっている地域との比較は、北軽井沢の将来に向けた示唆を得るうえで有効である。本ノートでは時間の制約から十分に扱えなかったため、次のステップとして取り組むことが求められる。

③大学村の文化・知的資源の体系的整理

当研究では文化人の生没年、滞在期間、大学村との関連などを概観するにとどまった。今後は、作品の内容との関係など、より精緻な文献調査を行うことで、大学村の文化的価値をより深く明らかにできる。

④地域連携の実践的可能性の検討

大学村 100 周年を契機としたイベント、文化発信、地域住民との協働プロジェクトなど、大学村と北軽井沢の「結び目」を具体的に設計する必要がある。

本研究ノートは、大学村と北軽井沢の未来を展望するための基礎的資料として位置づけられる。今後、歴史・文化・生活・地域政策を横断する多角的な調査と実践を通じて、避暑地の共同体と周辺地域がともに持続可能な関係を築くための道筋を探っていきたい。

資料 1 大学村における文化的活動の記録（筆者私的記録）

本資料は、筆者が 2014 年に法政大学村で開催された文化的イベントに参加した際に、個人的な記録として Facebook 上に投稿した文章である⁽¹⁰⁾。学術的分析を目的として書かれたものではないが、当時の大学村における文化活動の様子や、参加者の雰囲気を示す一次的な記録資料として位置づける。

この大学村は、組合組織であり、夏の間、村民のために、コンサートや講演会なども開催している。今日は、「火山のふもとで」という本の著者である松家仁之さんの講演会だ。

この「火山のふもとで」という本は、火山は浅間山、ふもとでというのは、ここ大学村が舞台になっているのだという。読売文学賞を受賞した作品でもある。私が、1 週間前に、北軽に着いた時から、この講演会のことは話題になっており、喜久子さん（叔父の義理の母）も、とても面白い本だったとおっしゃっていた。そういうわけで、楽しみにしていたものの、何の期待もせず、講演会会場に向かった。

会場は、北軽井沢の駅（と呼んでいる）のそばのミュージックホールで、既に 100 人くらいの人が集まっていた。大学村が主催ということもあり、7~8 割が大学村関係者ということもあり、尋問されるような気分で、緊張しているとおっしゃりながらも、松家さんは淡々とお話を始められた。長年、新潮社で編集者をされていた松家さんは、退職された後、2012 年に書かれた初の長編小説が「火山のふもとで」だそう。今、その時の気分を振り返った時に「共同体」ということがテーマであったとおっしゃった。

共同体というのは、ある人、あるいは、ある目的を中心に集まった人々の集団であり、この小説では、村井俊輔という設計事務所の所長を中心に、所長の「夏の家」に、夏の間は事務所機能を移転し、そこでの小さい共同体が物語の舞台なのだそう。松家さんは、この半年、ご自身にとって大切な仕事として、雑誌 *coyote* の依頼で、星野道夫さんの足跡をたどる旅と、イタリア文学者の須賀敦子さんについての対談をあげられた。そして、そのどちらにも「共同体」が根底

にあると、松家さんは感じたという。その例として、須賀敦子さんは、イタリアのコルシア書店（カソリック系の小さな出版社兼書店）という共同体に関わったことを、また、星野道夫さんは、自然写真家である前に、アラスカのエスキモーや、先住民達の共同体の人々との交流が深かったことや、水爆実験を政府がアラスカでやろうとしたことに対して、共同体として戦い、政府の方針を変えさせた二人の女性と星野さんとの交流などを語ってくださった。

松家さんは、編集者として星野道夫さんと交流があり、星野道夫さんに関わるエピソードもたくさん披露くださった。ここ大学村も、開村当時は、共同体が色濃かったのではないかという指摘も。失礼ながら、何の期待もしなかった講演会であったが、自分の研究テーマである「共同体」が、講演会のテーマであったことに、本当に驚いた。

参考文献・参考サイト

- (1) 内田青蔵他, 戦前期における軽井沢別荘地と洋風別荘の変容に関する研究, 住宅総合研究財団研究年報, 2001, 27(0), p.53-64
- (2) 梅干野成央他, 軽井沢における保養地景観の形成過程, 日本建築学会計画系論文集, 2010, 75巻, 647号, p.103-109
- (3) 峯苦俊之他, 別荘地の運営・管理における自治体の役割に関する研究, 都市計画論文集, 2010, 45.3巻, p.415-418
- (4) 法政大学のホームページ Vol.13 北軽井沢「法政大学村」～その1～ 法政大学ゆかりの地
https://www.hosei.ac.jp/hosei/daigakugaiyo/daigaku_shi/museum/2011/110720/?auth=9abbb458a78210eb174f4bdd385bcf54 (2025年11月1日参照)
- (5) 『大学村七十年誌』1999年, 北軽井沢大学村組合
- (6) 長嶋有, 2003「ジャージの二人」集英社文庫
- (7) 松家仁之, 2012「火山のふもとで」新潮社
- (8) 『大学村五十年誌』1980年・北軽井沢大学村組合
- (9) 長野原町過疎地域持続的発展計画
<https://www.town.naganohara.gunma.jp/www/contents/1630982231654/index.html> (2026年1月10日参照)
- (10) 今堀洋子 (2014) Facebook 投稿【ムラの講演会】
<https://www.facebook.com/yoko.imahori/posts/pfbid0CAR9zuNjYAPzmfyPSrQ6CHN6yaEAah2Ue9XBobqCqFtGsPyE269oKT6caKvmd6z7l> (2025年11月8日参照)